

## あだ名<sup>な</sup>

みなさんは、友だち<sup>とも</sup>や家族<sup>かぞく</sup>に、何<sup>なん</sup>と呼ばれて<sup>よ</sup>いますか？ 「パトリック」  
「じょうたろう」「みきこ」など、名前<sup>なまえ</sup>で呼ばれて<sup>よ</sup>いますか？ あだ名<sup>な</sup>で呼ばれて<sup>よ</sup>  
いますか？

「あだ名<sup>な</sup>」にはいろいろなものがありますが、もともとの名前<sup>なまえ</sup>を少し短<sup>すこ</sup>くし<sup>みじか</sup>  
たものが多い<sup>おお</sup>ようです。例<sup>たと</sup>えば、「パトリック」は「パット」、「じょうたろう」  
は「じょう」などと呼ばれる<sup>よ</sup>ことがあります。また、「みきこ」という名前<sup>なまえ</sup>の人<sup>ひと</sup>  
を「みっきー」と呼ぶ<sup>よ</sup>ように、もともとの名前<sup>なまえ</sup>を少し変<sup>か</sup>えたりする<sup>すこ</sup>ことも多い<sup>おお</sup>  
です。他<sup>ほか</sup>にも、「石田<sup>いしだ</sup>」という名前<sup>なまえ</sup>の人<sup>ひと</sup>を「石ちゃん<sup>いし</sup>」「石っち<sup>いし</sup>」「石ぴよん<sup>いし</sup>」など  
と呼ぶ<sup>よ</sup>ように、名前<sup>なまえ</sup>の一部<sup>いちぶ</sup>に短<sup>みじか</sup>い言葉<sup>ことば</sup>を付<sup>つ</sup>けたあだ名<sup>な</sup>もよく聞<sup>き</sup>きます。

「あだ名<sup>な</sup>」の中<sup>なか</sup>には、もともとの名前<sup>なまえ</sup>と全<sup>まった</sup>く関係<sup>かんけい</sup>のないものもあ<sup>たと</sup>ります。例<sup>たと</sup>  
えば、私<sup>わたし</sup>の知<sup>し</sup>り合<sup>あ</sup>いに「もり」と呼ばれて<sup>よ</sup>いる人<sup>ひと</sup>がいますが、「出身<sup>しゅっしん</sup>が青森<sup>あおもり</sup>県<sup>けん</sup>」  
というだけ<sup>ほんにん</sup>で、本人<sup>なまえ</sup>の名前<sup>なまえ</sup>とは全<sup>まった</sup>く関係<sup>かんけい</sup>が<sup>あ</sup>りませ<sup>ん</sup>。「青森<sup>あおもり</sup>」の「青<sup>あお</sup>」ではな<sup>く</sup>  
く、「森<sup>もり</sup>」の方<sup>ほう</sup>があだ名<sup>な</sup>になっ<sup>り</sup>ている理<sup>り</sup>由<sup>ゆう</sup>は特<sup>とく</sup>にありませ<sup>ん</sup>。ただ、なんとな<sup>く</sup>、  
だれ<sup>だれ</sup>が最<sup>さい</sup>初<sup>しよ</sup>に「もり」と呼<sup>よ</sup>び始<sup>はじ</sup>めて、だんだんとその呼<sup>よ</sup>び方<sup>かた</sup>が広<sup>ひろ</sup>まりました。ま<sup>た</sup>  
た、「もっち」というあだ名<sup>な</sup>の知<sup>し</sup>り合<sup>あ</sup>いもあ<sup>ら</sup>りますが、こ<sup>も</sup>ちらも本人<sup>ほんにん</sup>の名前<sup>なまえ</sup>とは関係<sup>かんけい</sup>

がなく、白くて柔らかそうな顔が「もち」に似ているという理由でつけられたあだ名です。他にも、冬にいつも帽子とマフラーをしていた友だちは、目の部分以外、顔が見えなかったので「忍者」と呼ばれるようになりました。今では「忍者」を短くして「にん」と呼ばれています。ちなみに、私の息子は1歳の頃、ほとんど泣かず、いつも偉い人のように周りの大人をじっと見ていたので、保育園の先生たちに「社長」と呼ばれていました。息子が2歳になる頃、同じような雰囲気の子が同じクラスに入ってきたので、その子のあだ名が「社長」となり、息子のあだ名は「会長」となりました。



あだ名<sup>な い</sup>の良いところは、それを呼ぶ人<sup>よ ひと</sup>と呼ばれる人<sup>よ ひと</sup>の、心<sup>こころ</sup>の距離<sup>きょり</sup>が近く<sup>ちか</sup>なることだ<sup>おも</sup>と思います。しかし、あだ名<sup>な い</sup>は良いところばかりではありません。例えば、「めがね」と呼ばれる<sup>よ</sup>ことは、人<sup>ひと</sup>によっては嬉しい<sup>うれ</sup>かもしれませんが、嫌<sup>いや</sup>だと感じる<sup>かん</sup>人もいます。また、体型<sup>たいけい</sup>や肌<sup>はだ</sup>の色<sup>いろ</sup>、髪<sup>かみ</sup>の様子<sup>ようす</sup>など、見た目<sup>み</sup>をばかにする<sup>め</sup>ようなあだ名<sup>な</sup>は、誰<sup>だれ</sup>にとっても嫌<sup>いや</sup>なものでしょう。そうしたあだ名<sup>な</sup>が、差別<sup>さべつ</sup>やいじめにつながる<sup>つ</sup>こともある<sup>あ</sup>ようです。

さいきん 最近<sup>さいきん</sup>、日本<sup>にほん</sup>の小学<sup>しょうがっこう</sup>校<sup>がっこう</sup>では「あだ名<sup>な</sup>を禁止<sup>きんし</sup>する」というルール<sup>つ</sup>を作る<sup>つく</sup>小学<sup>しょうがっこう</sup>校<sup>がっこう</sup>が増えて<sup>ふ</sup>きています。これは、2000<sup>ねんだい</sup>年代<sup>ねんだい</sup>から、いじめ<sup>い</sup>に苦し<sup>くる</sup>んで自殺<sup>じさつ</sup>する子ども<sup>こ</sup>たちが増<sup>ふ</sup>え、それを防<sup>ふせ</sup>ぐための法律<sup>ほうりつ</sup>が作<sup>つく</sup>られたのがきっかけです。「あだ名<sup>な</sup>を禁止<sup>きんし</sup>する」というルール<sup>つ</sup>は、国<sup>くに</sup>の法律<sup>ほうりつ</sup>の中<sup>なか</sup>にはありません。しかし、あだ名<sup>な</sup>の問題<sup>もんだい</sup>がいじめ<sup>い</sup>に関係<sup>かんけい</sup>していることも多<sup>おほ</sup>いため、多<sup>おほ</sup>くの小学<sup>しょうがっこう</sup>校<sup>がっこう</sup>で「あだ名<sup>な</sup>を禁止<sup>きんし</sup>する」というルール<sup>つ</sup>が作<sup>つく</sup>られたのです。

また、日本<sup>にほん</sup>では男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>の名前<sup>なまえ</sup>には「くん」、女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>の名前<sup>なまえ</sup>には「ちゃん」や「さん」<sup>つ</sup>を付<sup>よ</sup>けて呼ぶ<sup>い</sup>ことが一般<sup>いっぱんてき</sup>的<sup>てき</sup>ですが、最近<sup>さいきん</sup>はLGBTQ+<sup>せい</sup>など多様<sup>たよう</sup>な性<sup>せい</sup>への配慮<sup>はいりょ</sup>も大切<sup>たいせつ</sup>です。そこで、日本<sup>にほん</sup>の小学<sup>しょうがっこう</sup>校<sup>がっこう</sup>では、男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>でも女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>でも「○○さん」<sup>ふ</sup>と、名前<sup>なまえ</sup>に「さん」<sup>つ</sup>を付<sup>よ</sup>けて呼ぶ<sup>い</sup>ところも増<sup>ふ</sup>えてきています。

むすこ 息子<sup>むすこ</sup>（今<sup>いま</sup>は社長<sup>しゃちょう</sup>でも会長<sup>かいちょう</sup>でもなく、名前<sup>なまえ</sup>で呼ば<sup>よ</sup>れています）の小学<sup>しょうがっこう</sup>校<sup>がっこう</sup>では、クラス<sup>よ</sup>によって、呼<sup>よ</sup>び方<sup>かた</sup>のルール<sup>ちが</sup>が違<sup>むすこ</sup>うよう<sup>せんせい</sup>です。息子<sup>むすこ</sup>のクラス<sup>よ</sup>では、先生<sup>せんせい</sup>が子<sup>こ</sup>

どもを呼ぶときも、子どもたち同士で呼び合うときも、あだ名か、名前をそのまま使うそうです。しかし、同じ小学校の中でも、「〇〇さん」が使われているクラスもあるようで、実際には先生の考え方によって呼び方のルールは違うようです。

ただ、学校やクラスの中で呼び方のルールを作っても、学校の外の様子までは変えることはできません。また、ルールがあることによって、いじめや差別の問題が「先生や大人のいないところ」や「インターネットの世界」などの、見えにくい場所に隠れてしまうかもしれません。そもそも、友だち関係の問題などは、ルールによってコントロールできない部分も大きいのではないのでしょうか。

わたしは小学校であだ名を使うことに賛成です。しかし、あだ名で呼び始めるとき、相手の気持ちを考える想像力が何より大切だと思います。

(1710字)

(2021.11 Written by Junko SATO)

(All pictures are drawn by Akino SASAKI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.